

# 東京の三十年

## 映画文学人生論

原作：田山花袋（1917）「博文館」

明治二四年(1891) 21歳 尾崎紅葉訪問

明治二九年(1896) 26歳 島崎藤村との交友が始まる

明治二九年(1896) 26歳 国木田独歩訪問

明治三七年(1904) 34歳 日露戦争従軍、森鷗外と逢う

今に豪（えら）く成るぞ、豪くならずには置かないぞ

『東京の三十年』を読めば『蒲団』がわかる。田山花袋という作家の個性と開花期日本文学の背景もわかる——そんな読後感を抱いた。

三十年とは明治十五年頃から大正五年頃まで。作品でいえば、坪内逍遙『当世書生気質』から夏目漱石『明暗』の時代までだ。あるいは司馬遼太郎『坂の上の雲』の時代といえるかもしれない。

秋山兄弟や正岡子規は登場しないが、田山録弥を主人公、国木田哲夫と島崎春樹を副主人公とする文学書生たちの群像を描いたもう一朵（だ）の『坂の上の雲』の思い出だ。

田山録弥の父親は西南戦争で戦死し、九段の招魂社に祭祀されていた。録弥がお詣りに行くとたびに、「今に豪（えら）く成るぞ、豪くならずには置かないぞ」という声が内部から起こった。

それに対して、「小説なんか書いて、ぐずぐずしている奴は、何うせ碌なものになれやしない」という冷たい批評の目と言葉とが周囲から浴びせかけられたが、彼は「今に、今に、俺だって、豪くなる……豪くなる……豪くなる……豪くなる……日本文壇の権威になって見せる」と自己暗示をかけた。

才能に恵まれていたかどうかはわからないが、漢詩や和歌を学び、英語、ロシア語、フランス語の文学をまじめに勉強して頑張った。尾崎紅葉、森鷗外など文壇の先輩作家や国木田独歩、島崎藤



# 東京の三十年

——— 映画文学人生論

村など新進作家には自分から進んで逢いに行き、交流を結んだ。

二十一歳の頃、横寺町の尾崎紅葉に文学志望者として指導してほしいという鄭重な手紙を書き、紅葉を訪問したことがある。泉鏡花や小栗風葉のように内弟子にしてくれなかったが、暇を告げ、帰ろうとする紅葉は俳句を書いて与えた。花袋は感激したとは書いていない。

明治三十七年に勃発した日露戦争には志願して写真班の一員として従軍する。戦争が終わった翌年、島崎藤村の『破戒』が喝采を博し、国木田独歩の『運命』も好評で、版を重ねた。「ようやく我々の時代になって来そうだぞ」と独歩が笑いながら言った。

そこで、花袋が意を決して、彼のアンナ・マール（ハウプトマン『寂しき人々』の女主人公）を書いたのが『蒲団』である。書けば恋をすっかり破って棄てることを覚悟しなければならぬが、彼は恋をあきらめ、作品を公表した。

世間は『蒲団』を『破戒』『運命』とともに、日露戦争後の新しい文学的潮流である自然主義文学の代表作として受け入れた。自然主義文学は尾崎紅葉のひきいる硯友社の戯作文学に代わって、文壇の主流になり、花袋は自己暗示の通り、文壇の権威になった。

柳散る千筋となでし黒髪も

尾崎紅葉